# 常　識　っ　て　な　に　？

## －ワークショップ「ちがいのちがい」を通して－

○意欲　　○共生（連帯）　　高等学校１年生

### １　題材設定の趣旨

・小・中学校で学んできた人権教育を発展させつつ、ワークショップ「ちがいのちがい」を主題にして、自分自身を大切にしながら、他の人と共に生きていくという視点での人権教育を展開する。
・今後『総合的な学習の時間』の展開のあり方をさぐるものとして取り組む。

### ２　ねらい

・日常、私たちが何気なく接している様々な事象に目を向け、改めて見返したり考えたりする力を育む。
・社会との様々な関わりの中で生活していることに気づく。
・グループによる話し合いを通じて、相手を理解する姿勢を学ぶ。
・気づきから行動への意欲と実践力を身につける。

### ３　指導計画　　時間配当　　９時間

Ａ　学習内容

| 時間 | 学習内容 | 活　動　内　容 | 評　価 |
|---|---|---|---|
| 1 | ①<br>オリエンテーション | この講座の趣旨を説明し理解する。<br>・各々の課題について、生徒たちの自由な考えが基本となること。<br>・この上にたち、「あってよいちがい」か「あってはいけないちがい」かをグループで考えること。<br>・課題については、正解はなく、各自の思いを大切にしたいこと。 | ・講座のねらいを理解する。 |
| 1 | ②<br>・グループ分け<br>・２つの不在連絡票 | ・「誕生日チェーン」を使いグループ分けを行う。<br>・宅配便業者２社の不在連絡票を使いそれが私たちの人権とどのように結びついているかを考える。 | ・友の協力に気付き、自分を振り返ることができる。<br>・視覚障害への心づかいに気付く。 |
| 1 | **③事例１**<br>**「ちがいのちがい」**<br>**（その１）**<br>**指導計画Ｂ参照**<br>**（P16）** | ・「ちがいのちがい（その１）」のカードを使い、グループごとにあってよいちがいとあってはいけないちがいを考える。 | ・グループ内での話し合いに積極的に参加できる。<br>・自分の考えを話すことができる。 |
| | | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 2 | ④⑤<br>討議とふりかえり | ・前時の生徒たちの考えをまとめ、個別の課題について討議していく。終了後、各自の気づきや感想を書く。 | ・全体での話し合いに主体的に参加できる。 |
| 1 | ⑥<br>**「ちがいのちがい」（その２）**<br>**事例３(P19)** | ・「ちがいのちがい（その２）」のカードを使い、グループごとに、あってよいちがいとあってはいけないちがいを考える。<br>・２回目のカードは、前回より深く考える要素を含んだ課題とする。 | ・グループ内での意見の違いを認め合うことができる。<br>・自分の考えを話し合いを通じて深めることができる。 |
| 2 | ⑦⑧<br>討議とふりかえり | ・前時の生徒たちの考えをまとめ、個別の課題について討議していく。終了後、各自の気づきや感想を書く。 | ・他のグループの考えを認め、自分たちの考えとの違いを認識できる。 |
| 1 | ⑨<br>まとめ | ・この講座のまとめをした後、全体を通じて感想を書く。<br>・(200字程度) | ・講座全体に対する「ふりかえり」ができる。 |

B　使用した「ちがいのちがい」のカード

**高校同和教育指導資料「Human Rights in Nagano 」49ページ～52ページ参照**

C　「ちがいのちがい」の進め方

①グループ分けをする。今回は、６グループに分けた。
②カードゲーム「ちがいのちがい」について説明する。この時、難しい言葉については事前に簡単に説明する。
③グループ内で、それぞれの設問について「あっていいちがい」なのか「あってはいけないちがあい」なのかを話し合う。その際に、なぜそのように考えたかの理由を大切にし、グループとしての選択をする。意見が分かれたカード、判断ができなかったカードは「どちらともいえない」カードとし、最後に全体で討議する。
⑤意見の分かれたカードを中心に、全体で討議する。ほとんど全員が同じ意見であっても、考え方に問題があったり、浅かったりした時は、異なった角度から考える。
⑥最後に、ふりかえりのために各自の気づき、感想を書く。

4　事例(1)　9時間中の第2時

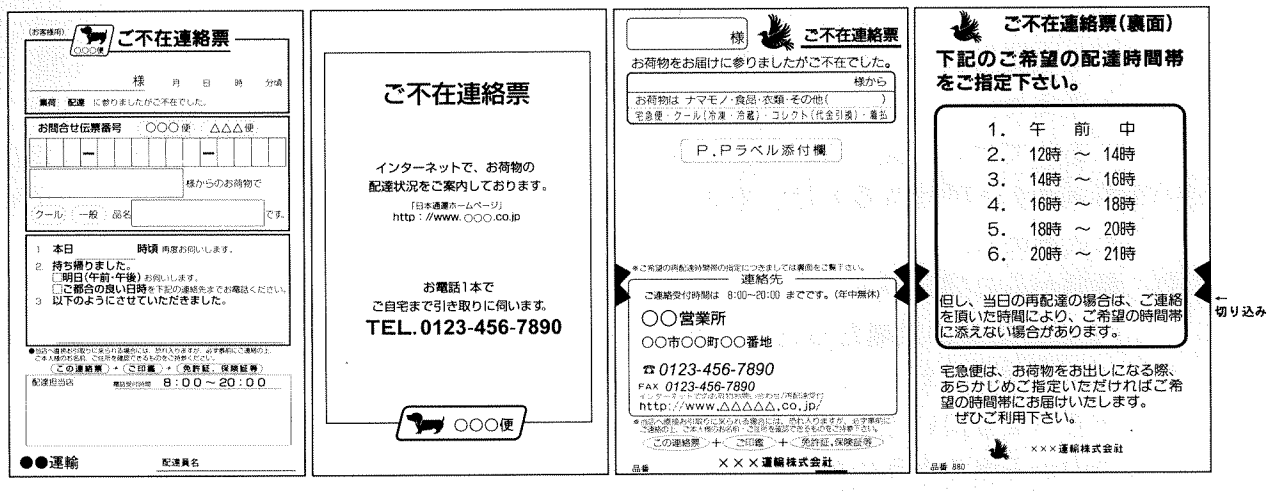
A　題材　**「宅配便業者２社の不在連絡票」**

B　ねらい

・宅配便業者A運輸とB運輸の不在連絡票を示し、グループごとに2枚の連絡票の違いと、その違いは、どのようなことを意図したことなのかを考える。

・連絡票を受け取った立場に立って考える

・この学習は、業者間の優劣をつけるものではないことに注意する必要がある。




A運輸の不在連絡票　　B運輸の不在連絡票

C　グループの考え

・A運輸は、不在の時、荷物をどのようにしたかがわかるようになっているが、B運輸の方はわからない。

・B運輸の方は、配達時間の指定ができるようになっている。

・A運輸の方は、配達員の名前が記入されている。

D　生徒のふりかえり

・目の見えない人でも不在連絡票があるということがわかるようになっているということなのだが、このことは目が見えていてもわからなかった。

・2つの不在連絡表の違いを考えて、今まで気づかなかった違いに気づくことができた。

・宅配便の、目の不自由な人へのさりげない心配りに気がついた。

E　本時のまとめ

・B運輸の不在連絡票には、両サイドに切り込みが入れてある。A運輸の連絡票は長方形になっている。

・B運輸の話によると、切り込みは視覚障害の人に、不在連絡票が来ていることをわかってもらうために、意図的に入れてあるとのことである。

・両方の連絡票を見たとき、私たちはそれらを目で見ることができ、しかも書かれている文字が読めることを前提として考えてしまう。

・その結果、連絡票に書かれていることに注意が集中してしまい、形が異なっていることに気がつかない。したがってその意味にも気づかないことになる。

・今、自分が立っている場所（目が見える、文字が読める）を当然のこととして認識してしまうと、見えていながら、結果として大切な部分を見落としてしまうことがある。

5　事例(2)　9時間中の第4時

A　題材カード

**『G病院では高齢者の患者さんに「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼んでいるが、H病院では「○○さん」と、その患者さんの名前で呼んでいる。』**

B　ねらい

・病院での患者の立場に立って考える。

C　グループの考え

グループごとに分かれた。

・「あってもよいちがい」と考えたグループは、病院の方針によって変わっても良いと考えた。

・「あってはいけないちがい」と考えたグループは、他人に「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼ばれるのは、患者さんの気持ちを考えていないので、名前で呼ぶべきだと考えた。

D　教師からの問いかけ

**「自分が患者の立場だったら、どちらが良いだろうか」**

E　グループの考え

どちらでも良いという意見が多かったが、名前を呼んでほしいという意見が話し合いの中から出るようになった。名前を呼ぶべきだと考えたグループの意見は、次のようなものである。

・このカードについての私の意見は変わった。友達の意見を聞いて納得できた。お年寄りだけでなく、誰にでも名前で呼ぶべきだ。
・医者や看護婦でも「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼ぶのはおかしい。「○○さん」と呼ぶべきだ。
・自分が「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼ばれるのは嫌だと思った。自分のこととして考えるとよくわかる。

一方、どちらでも良いと考えたグループの意見はこの1点である。

・病院の方針なのだから、このちがいはあってもよいちがいだ。

F　本時のまとめ

・多くの生徒は「あってもよいちがい」と考えてしまった。どうしても、自分自身の問題とはとらえられないようだ。自分では嫌だけれど仕方がない、という意識のようであった。
・一部、あってはいけないと、考えを変えた生徒が出てきた。話し合いをする中で、自分の意見を修正することのできる生徒もでてきた。

## 6　事例(3)　9時間中の第7時

A　題材カード

**『Ａさんは90歳で逝去されたが、Ｂさんは50歳で逝去された。』**

B　ねらい

・当たり前に思えることを、視点を変えて考えてみる。

C　グループの考え

すべてのグループが「あってもよいちがい」と考えた。その理由も、「寿命なのだから」ということで統一されていた。

D　教師からの問いかけ

**「もし、このちがいがあってはいけない場合があるとしたらどんな場合だろう。」**

E　グループの考え

自殺・他殺・事故死といった考えが多かった。1つのグループから、**医療ミス**での死はあってはならないということが出された。

F　生徒のふりかえり

・「あってよいちがい」と思っていたものは、他の見方から見ると「あってはいけないちがい」というところもあって、見方によって変わってくる。
・当たり前だと思って考えると、本当に当たり前だけれど、視点を変えて考えるといろいろ意見があって、新しい考えになってくる。

G　本時のまとめ

・ごく当然のことと考えられることでも、視点を変えることによって、違ったものが見えてくることに気づいた生徒が多かった。
・こうした姿勢は、日常生活における男女の役割分担など、当然とされている事柄に対しても、違った見方ができるようになってくるのではないだろうか。

## 7　講座終了後の生徒の気づきから

A　「ちがいのちがい」に対して

・日常当たり前と思っている事が、見方を変えたり人の意見に耳をかすことによって、違う答えが見つかることに気がついた。
・違うということは、人それぞれの生き方に関係する。だから、違いがあることを認め合うことが大事なことだと思う。
・私たちは、日常の生活の中で、気づいているようで気づいていない事が多いのだと改めて気づいた。
・「ちがい」というのはすごく身近にあるということに気づいた。

B　講座に対して

・初対面の人と意見を出し合ったりするのが、初めは難しかったけれど、後半はいろいろな意見を言うことができて楽しかった。
・正解のない事に対して、みんなで話し合ってみるということも大事だ。
・同じようなことは中学校のときにもやったけれど、中学校時代にはなかった考え方を持った人もいて驚いた。

・区別の付かないものについては、 そのことを自分の中で常識だと考えてしまい深く考えようとしないことがあることに気づいた。
・差別というものは、私たちが当然だと思っている事柄の中にたくさんあるということがわかった。
・当たり前だと思っていると、大切なことに気づかないことが多い。
・自分が考えていたこと以外の意見がたくさん出てきて驚いた。これからも身の回りの「ちがい」について、考えていきたい。
・自分たちには直接関係のないこともあったが、考えたということは大きかった。世の中にあまり関わらずに生きてきた自分たちだが、初めて関わりを持った気がした。

## 8　成果と課題

**【成果】**

(1)　この教材は「総合的な学習の時間」のテーマの一つとして行い、教員2名でのティームティーチングの形態をとったのもである。生徒数が幾分多く、まとめることに苦労した面もあるが、一緒に担当してくれた教員の積極的な姿勢に助けられたことが多かった。

(2)　この時間では、なるべく一つ一つの課題について、じっくりと考えるように時間を設定した。

(3)　生徒たちは、ワークショップの経験があまりなく、最初はとまどいがあったようだ。また、「ちがいのちがい」（その1）では、課題に対して、「人それぞれだから、それは仕方がないことだ」というような、自分の問題とは考えない姿勢の生徒が多く見られた。

(4)　「ちがいのちがい」（その2）になると、「自分にとって」とか、「自分なら」といった姿勢を持つ生徒が見られるようになった。また、「当たり前のこととして見過ごしてきたことを、違った視点から見直すことができた」という感想が多くなってきた。

**【課題】**

(1)　講座に対して最後まで意欲を示せず、グループでの話し合いにも参加できなかった生徒が少数ではあるが見うけられた。興味を感じて選択した生徒が意欲的に取り組めなかったことは、担当者の側からも反省すべき点があろうと思う。しかし、参加したくない権利も大事にしていくことが必要である。

(2)　体験的参加型学習の最大のポイントは、「ふりかえり」にあることを忘れてはならない。多様性を認めつつも、こう考えたらどうか、という方向付けを持っていることは必要である。